

2 部経済学科 I

後輩のみなさんへ

仲田 智恵子

私が就職活動で大切だと思ったことは、行動するという事です。自分のやりたいことがはっきりしていなくても、まずはいろいろな企業の説明を聞いてどんな会社があるのかを知り、少しずつ軸を決めて活動していけばいいと思います。私も活動していくうちに希望が変わっていき、活動当初と終了時では業種も勤務地も変わっていました。周りの人が先に内定を貰っても焦らずに、自分を信じて納得のいく結果を出せるよう最後まで諦めないで欲しいと思います。それと、なるべく早いうちから余裕をもって活動することをお勧めします。辛いことが多いと思いますが、その時は一人で悩まず周囲の人に助けてもらいながら頑張ってください。

大学の授業の中でゼミ活動が最も充実していたと思います。初めは授業についていけないか不安でしたが、ゼミ生たちとの交流や先生の親身な指導のおかげで沢山のことを学ぶことが出来、今はこのゼミに入って良かったなと思っています。

卒業論文のテーマは、より自分の関心が強いものを選ぶことをお勧めします。私はペット産業について書きました。自分でもペットを飼っていたので興味を持って書くことができ、わりとスムーズ完成させることが出来たと思います。また、様々なペットビジネスがあることを知り、飼い主としてもとても参考にもなりました。私は余裕をもって完成させたかったので、「今日は何字書く！」と決めて、書ける章・節から書くようにしていました。

無事に就活と卒論を終えることが出来たのは周囲の人の協力があったからこそだと、とても感謝しています。みなさんも悔いのない学生生活を送られることを祈っています。

就活体験記

堀内 雅代

2008年7月7日七夕の夜、日本赤十字社より内定をいただきました。それまでの道のりは人生で一番辛かったです。

就職活動を始めたのは大学3年の4月でした。当初は公務員になりたいと思っていましたので、独学で試験勉強をしていました。公務員試験の勉強に費やした時間はたった10ヶ月間でしたが、それはもう大変でした。経済学部なのに、憲法・民法・行政法まで覚えなければなりません。夏休みにはいると、公務員試験対策の講座を受講しほぼ毎日大学に通いました。その後も、誰よりも早く図書館に行き、館内の閉鎖時に流れるカノンを聞いて帰りました。学校の帰り道は、ほぼ毎回のよう泣いていたのを覚えています。だいぶ拒否反応もでたし、不眠症に悩んだ時期もありました。

3月にはいると、初めてリクナビ、マイナビの登録をしました。企業を受けようと思ったからです。というのも、公務員の一次試験に合格した後のことを考えなければならなかったからです。試験に合格すると、次は面接があります。その面接練習のために一般企業の面接を体験しようと思ったのです。そこで巡り合ったのが日本赤十字社でした。もともとなぜ公務員を目指そうと思ったのかというと、

利益を求め企業で働きたくなかったためです。その意味では赤十字も同じでした。

それからは公務員試験と並行して赤十字の試験を受験しました。5月は3つの国家試験と赤十字の筆記試験がありました。幸い、公務員試験の勉強をしていたため赤十字の教養試験と論文試験はなんとか通過することができました。6月には2つの国家試験と赤十字の3次試験がありました。3次試験は30分間のグループディスカッションと5対1の個人面接です。そして7月2日に3対1の最終面接でした。

個人面接は、事前に面接官から聞かれそうな質問にすぐ答えられるようにQ&Aを考えていました。事前に準備をしておけば、気持ちも楽になります。とはいえ、やはり誰でも緊張します。面接はドアをノックする瞬間が一番緊張しました。面接の半分は緊張で声が震えていましたし、試験後、足がしびれて歩けなくなったこともありました。それでも、気合で乗り越えられました。自信を持って挑んでください。出身大学など関係ありません。自分の意見をはっきりと面接官に伝えることが大切です。筋が通っていれば、意地悪な質問をされた時でも混乱せず答えることができます。

結果的に公務員になることはありませんでしたが、公務員試験に費やした時間は無駄であったと思っています。この経験があったからこそ、面接試験も乗り越えられたのだと思っています。最後に、ゼミの仲間や家族や藤井先生やその他多くの人たちにありがとうと伝えたいです。

P. S. 気休めかもしれませんが、多くの神社でお参りしたり、お守りを買ったり、短冊に願いを込めたりしていましたよ。そして願いが叶いました。

卒業によせて ～ゼミへの感謝と後輩に贈る言葉～

一井 正樹

【師と出会える場、そこから学んだこと】

私は現役の学生ではないので、28歳ともなると「人生の師」という人が一人はいます。そして私はいま、もう一人の新たな師を持つことができました。それが藤井信幸先生です。

私は先生を、幕末の異才、勝海舟のような人物だと思っています。それは、先生の博覧強記にて論旨明快、饒舌にて歯に衣着せぬ物言いや、独特のユーモアと茶目っ気たっぷりの性格が、非常に彼と似ているからです。

勝も幕府の重職にありながら、卓越した洞察力で舌鋒鋭く幕府の問題点を指摘し、その一方で決して偉ぶらず、誰にでも平民と同じ言葉遣いで接し、話の解りやすさと独特の愛嬌から多くの人物を魅了したといえます。坂本竜馬も、そんな勝に惚れた人物の一人でした。

私は竜馬の足下にも及びませんが、先生からは本当に多くのことを学びました。特に私にとって重要だと思われるのは、次の3つでした。1つ目は「何事も論拠を明らかにすること」、2つ目は「脚を使うのを厭わないこと」、3つ目は「大人の勉強は楽しむこと」であります。

まず1つ目の「何事も論拠を明らかにすること」は、これから面接試験をされる方にも、また実際に就職をされる方にも、自分の考えを相手に解ってもらうためには非常に重要なことではないでしょうか。

特に私は「思い」が先行するタイプで、理屈は後からついてくるという考えが人一倍強く、百の言葉よりも一つの実行のほうがよほど説得力を持つと考えている人間です。要するに、実践第一主義者

なのです。

むろん、この考えにいまも変わりはありませんが、しかし人間同士のコミュニケーションは、それだけでは通用しません。いわば私のもっとも苦手な部分が、先生の指導によってずいぶんと鍛えられたように思います。よってこれからは、まず言葉で説得し、その上で実践によって証明するという、より強力な方法で行動していきたいと思います。

2つ目の「**脚を使うのを厭わないこと**」というのは、先生が師と仰ぐ方の「頭減らすな、鉛筆減らせ」の言葉によるものです。これは要するに、机の上であれこれ考えるよりも、まずは自ら歩き回って自分の目で見て、感じ、情報を集め、それから考えろということです。これもまた、想いの先行する私にとっては、非常にいい教訓となりました。きっと多くの方にも通用することだと思います。

3つ目の「**大人の勉強は楽しむこと**」というのは、どうやら先生の信条のようですが、私が直接言われたのは、ある日の飲み会の席でした。そのとき先生が、私がいつも「日本国憲法」の書かれた小さな本を持ち歩いていることを知り、「一井、そんなもの読んでいて楽しいか?」と言い、それに続き、上記のようなことを口にされたのでした。

もちろん私は私なりに興味があるから、それを持ち歩いて読んでいたわけですが、いずれにせよこの言葉には、ハッと気づかされるものがありました。つまり子どもの勉強というのは、多少我慢してでもやらなければいけないところがあるが、大人になったら、むしろ楽しさを感じられるような勉強をしなければならないということなのでしょう。またそこにこそ人生の醍醐味もあるということなのかもしれません。

このように、私が藤井先生から学んだことは、おそらく多くの人にとっても通じる、普遍的なことばかりだと思います。この普遍的でありながら、かつ未だ自分の気づいていなかった何か、を教えてくれる人こそが人生の師であり、そしてそのような人に出会える場こそが大学のゼミなのではないでしょうか。

私はそういう場にめぐり会えたことを嬉しく思うし、またそういう場にしてくださった藤井先生には大変感謝しております。そして、この幸せな時間を共有した7人の愛すべき仲間たちに恵まれたことも、私にとってはかけがえのない財産です。

【私の考える、本当の就職活動】

最後に、就職活動についての私見を述べたいと思います。

いま、世界が同時不況に陥り、日本の企業も軒並みその煽りを受けて、連日のように労働者の解雇、契約の打ち切りなどが報道されています。さらには内定者の取り消しや、来年の新卒者は採らないという企業まで出始めたことから、就職活動は一気に厳しくなっているとされています。

しかし私は、本来波のある景気の良し悪しに、いちいち一喜一憂する必要はないと考えます。“ピンチはチャンス”ですから、いまをむしろ自分を練り上げるいい機会だと捉えるべきではないでしょうか。それは例えば、今後数年間を海外留学に充ててみるとか、青年海外協力隊に参加してみる、あるいは世界の途上国を旅して周る、というのでもいいと思います。どのみち当面の就職が難しいのですから、何も無理して就職するよりも、そのように見聞を広めたり、貴重な経験を積んだりしたほうが、よっぽどマシなのではないでしょうか。

そもそも「就職活動」というのは、大学3年の秋になってから始まるものなどではなく、これまでの人生そのものが、まさに「就職活動」であったといっても過言ではないと思います。なぜならば、生まれてから現在に至るまでの間に、「自分はこれをやりたい」とか、「自分はこういう風になりたい」などというものは、多少なりとも自分の中にあっただけだからです。

そういうものは、本来景気の良し悪しによって変えるべきものではないはずですし、もし変わってしまうようなら、それはおそらく景気のせいなどではなく、執念の欠如によるものでしかないと思います。また、仮にそのせいで別の職に就けたとしても、真に打ち込むことができるとは到底思えません。

自分のやりたいことを、単に希望で終わらせるか実現させるかの違いは、ひとえに執念の有無だと思います。もし私が就職の面接官だったら、間違いなく執念を持った人間を選ぶでしょうし、おそらく本当に会社が欲しい人材も、きっとそういう人間なのではないでしょうか。

—了—